

やもめと裁判官

ルカ 18 章 1-8 節

18:1 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。

18:2 「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。

18:3 ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。

18:4 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。

18:5 しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」

18:6 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。

18:7 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるだろうか。

18:8 言うておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

説教

<たとえの概要>

気落ちしている弟子たちにイエスはたとえを話します。

18:2-5 「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、

彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」

<へんな話>

たとえ話はひとの記憶に残ります。とくにイエスは印象的なたとえを用います。きょうのテキストも印象に残るたとえです。というより、正直なところ「へんな話」です。

「自分は神など畏れないし、人を人とも思わない」裁判官、典型的な悪人です。またこの不正な裁判官にしつこく付きまとう「うるさくてかなわない」やもめも似たような感じで、いまでいうならさしずめストーカーです。

<現代風にアレンジ>

役所の福祉窓口に来てくる婦人がいた。あれこれと訴えをする彼女に職員はやんやりと丁寧に接し、窓口を回すなどして対応していた。毎日役所に通う婦人はついに切れて窓口でわめいた。自分の手に負えないと思った職員は課長を頼って彼女とのいきさつを話した。窓口に来た課長はついに未亡人の訴えを聞き入れた。

ストーカーというかクレーマーというか、実際のところ現場の対応はこんな風になるのではないかなあ、と私は思います。

<取り急ぎの結論>

たとえ話は教訓を含むものや、深い人間洞察が読み取れるものは納得できて福音として響くのですが、どう読んでいいのかさっぱりわからない「たとえ」はわたしたちにとって「へんな話」になるようです。きょうのたとえで言えば、気落ちしている弟子たちにとってこのやもめのたとえがなぜ励ましになるのか腑に落ちません。

やもめの訴えの内容がテキストのたとえでは明らかになっていないので、わたしたちのご利益をやもめが訴えているのだろうと想像してしまうからかもしれせん。

しつこい祈りが神の重い腰をあげさせる？（まさかこんな話ではないでしょう）

<編集史的解釈では>

福音書は著者がイエスの伝承やイエス関連文書を素材に著者のイエス理解に基づいて編集して記述したもの、という見方を福音書の編集史と呼んでいます。

この見方では、著者ルカは17章20-37節に続いて18章1-8節を編集することで、このたとえを終末に関連したイエスの教えという見方を示します。

17章20節以下では弟子たちの「神の国はいつ来るのか」という問いに続いてイエスの答えが2つ述べられます。1) 神の国は目に見えないがいまここに、あなたたちの間にある。2) 人の子はその日（終末の日）にやってくる。この17章の「神の国」問答に関連して18章を見てみるとこうなります。

1節：「気を落とさずに絶えず祈れ」は終末の日がなかなかやってこなくてもあきらめるなという意味。

2-5節：やもめと裁判官のたとえをはさみます。

6-8節：まとめとして、うるさく付きまえば不正な裁判官だってやもめの言う事を聞く、まして神が聞かないはずがない、速やかに裁く。しかし人の子が来る時、信仰を見出すだろうか、と主イエスが教えます。

18章だけ読んでいると唐突に思えるこの6節以下の主イエスのまとめの言葉「速やかに裁く、人の子が来る」も終末、再臨、神の国という文脈の中で生きてきます。

（短い祈り）自由に用いる

全能の神よ、きょう聞いたみことばを心に深く植え込み、み恵みによって行いの実を結び、み名の栄光をあらわすことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン

* 福音書が成立した時代に「終末の遅延」という問題が信者の間に広がっていたという見

方があります。福音書成立前に書かれたパウロの書簡にはすぐにでもキリスト再臨があり、この世は裁かれ、神の国が実現するというユダヤ教的終末思想信仰がありました。しかし、そのキリストはパウロが殉教してもエルサレムが陥落しても訪れません。信者たちの間にあきらめムードがあったというのです。やもめ=信者たち・裁判官=迫害者たちとたとえることで熱心な祈りを奨め、終末をあきらめない、キリスト再臨を待ち望むという励ましの福音となります。